



おじさんズ通信

2021年7月号 (No.8)

発行元：登別市新生町4丁目桃柿通

緑風舎

発行者：おじさんズ3号

大判紙 シネマは東 絵図西へ

何とか体裁を整えなければと宿題状態だった映画のポスター4枚を、やっと手作りボードに貼りフィルムカバーを付けて展示可能にした。縦長の2枚はオードリー・ヘップバーンの笑顔がまぶしい「ローマの休日」と、ボガード&バーグマンの「カサブランカ」。作品に登場してもう半世紀以上経つというのに、銀幕（古いか？）の主人公たちの魅力は、今も色褪せることなく輝いている。早速、舞台も制作して、週1回開いているワンデーシェフの店内に展示した。ちなみに、もう一枚飾った朝日新聞の名作紹介記事によると、カサブランカとはスペイン語で「白い家」の意味だとか。

もう2枚は見開き新聞紙サイズの「十戒」と「マルサの女2」。こちらは、登別映像機材博物館に置いてもらっているキネマ旬報バックナンバーの盛り立て役として、ボードも修復して、再度陳列してもらった。

《いかなるコレクションも、衆目にさらされてこそ初めて時代の証言者となる》とは、私の創作「ジブシー博物館」冒頭のフレーズだが、もう1枚、衆目にさらしたいのが昭和26年の室蘭市内交通案内図（57×83センチ）。当時の工場群や商工業施設、公共の建物などを配置した絵図で、数えてみると映画館が7つもあった。今は部屋の壁に飾っているが、これを室蘭のコミュニティーカフェらしき所に差し上げて、展示してもらえないものか、候補先物色中だ。

室蘭のものはムロランに、映画のポスターはそれ相応の場所に。というわけで、この記事の見出しに蕪村の名句をパクった次第。歴史の証言者は、蔵にしまい込まず、どんどん白日の下にさらしていこう！



帰ってきた齋藤隆夫

「あの本は、どこにある」と、大したスペースもない本箱を何回漁っても出てこなかった文庫本が、最近、ある人の元から戻ってきた。貸した記憶はすっかり飛んでいる。想像するに手渡したのは、もう20年以上前だろう。

「齋藤隆夫かく戦えり」（草柳大蔵著、文春文庫）。



サイトウ・タカオといっても、先ごろ単一漫画シリーズ部門でギネス認定されたゴルゴ何トカの作者ではない。

「二・二六事件」直後の昭和11年5月7日、国会で軍部の政治介入を厳しく批判する肅軍演説を行った民政党的代議士、齋藤隆

夫の評伝だ。昭和15年2月の帝国議会では支那事変に関して「徒（いたずら）に聖戦の美名にかくれて、国民的犠牲を閑却し」と軍部の横暴を糾弾、自ら民政党を離党した。さらに、懲罰委員会にかけられ除名処分の一。

孤立無援の中、軍部が政治集団化していくことの危険性を堂々と議会で演説した一代の論客。この本を思い出したのは、最近の政治や社会的風潮に嫌悪感を覚えるからだ。

挙げればキリがないのでやめるが、一つだけ、これはよろしくないと思ったのは世論調査にみる若者の政治意識だ。「ときの政権の政策に反対なら、対案を出せ」「反対ばかりで野党はイヤだ」「やはり、政党は数が大事だ」…

野党が政権の愚策や泣き所、明かされてマズイところを攻撃せずして、何のための野党だ一というのが、

私の結論。極論との謗（そし）りを受けるかもしれないが、野党は徹底的に野党の責務を果たさなければならない。どこの政党が政権を握っても。

そこで思い出したのが、軍部の弾圧をものともせず、議会で正論を吐き続けた齋藤隆夫という存在。「ワシは国政を論ずる代議士である。兵庫県の小さな利益のためにワシを使ってはならん」と陳情者を追い返しても、選挙区ではトップ当選してしまう。今の時代、こんな国会議員、まず、いないだろうな。

本書の第1刷は1984年。よろしければ、ご一読を。

「それが、食べるのよ〜」

朝食後の食器は各人で洗うルールが敷かれて半年か？ 時々、そのひと仕事が楽ちんになるのが、和風ワンプレートこと土鍋チャンの利点。最近、特に朝食は胃にやさしくと、具材多めの「半粥」鍋を所望することが多い。しかし、箸をつけながら「これは簡単でいい」と舌鼓していると「作るの、私なんですけど」と辛口調味料を振りかけられ、逃げの黙食モードに移った。



おとし、家人が旅行で2週間不在となり、「さて、一人食卓は好きなレシピで」と意気込んでみたものの、結局食卓に並ぶのはカップ麺や食品売りの各種総菜、七色野菜パック、レトルトカレーなど出来合い物のオンパレードだ。戦い敗れて日が暮れては、海の向こうの大陸を巡る山の神に、心の中で三拝九拝したような、しなかつたような…。

そして思い出すのは、数年前、病院の待合室で耳にした同年配か、やや下の主婦らしき三人組の一人が発したひとこと。

「それが、食べるのよ〜、三度、三度」

気だるさを含んだ、ため息まじりの語り口から、ご主人の食事の支度に1日中、家に縛られる主婦の嘆き節が読み取れた。せめて、昼食ぐらいは自分で料理するなり、カップ麺なんかで済ませてよ、と言っている。たまには、お友達と昼前からゆっくり、お出かけした

いーと。

分かります、分かります。よ〜く、分かります。と同情しつつ、普段、文句もいわず食事を出してくれるかの人も、腹の底ではひょっとして…。

バター炒めのスパゲッティぐらいは、作れそうです。

札幌軟石、登別軟石

札幌まで行かなければ買えない、と思っていたご当地グッズを、室蘭市中央町にある古本と雑貨の店で見付け、早速、買い求めた。

札幌軟石を加工、彩色したアロマストーン「かおるいえ」と「軟石マグネット」。2つ合わせて、お値段1300円だったかな。

欲しかったのは、登別軟石で何かグッズは作れないかと以前から思案していたから。札幌、登別、どちらの軟石も銀行や郵便局などの建築材として長く使われてきたが、登別の方は数年前に産出が終了した。

絵や色がない部分にアロマオイルを2、3滴しみませ、香りを楽しむアロマストーン。石蔵のデザインがかわいい。登別でも、こんな小技の効いた軟石グッズ、作れないものかな。ねえ、栄町の軟石ハカセ。



薫風 烈風

▶新型コロナのリバウンドも気がかりだが、お天気レーダーを見ていると室蘭、登別の上空に数日、雨雲が居座って雨続きだ。ハザードマップを開いたら、数百メートル西に土石流警戒地域あり。用心、用心。

▶メールに添付した「おじさんズ通信」PDFファイルをお受け取りの皆さまへ。お寄せいただいた感想文等々、間違いなく読んでおりますので、こちらからの返信がなくても、ご安心を。郵送でお受け取りの方々へ。万馬券のおすそ分けで、切手代、インク代は数年先まで貯蓄済みですので、ご安心を。

▶もっとも、その数年先が確かなものやら。とりあえず、9月発行（No10）への一里塚へ向けてGo。それでは、皆さん、お元気で〜。